地中海文明の起源

ムハメド・ハシヌ＝ファンタール／通訳・翻訳、三浦信孝

お集まりの皆さま、親愛なる同僚の皆さま、本日、皆さまの前で「地中海とその文明の生成」についてお話しできることは大変な喜びであり、名誉と感じております。

また、友人の服部英二先生にはこのような高名な大学にお招きいただき、貴重な機会を与えていただいたことに心から感謝します。

服部さんは南北間の友情のためにずいぶん高貴な仕事をなさってきました。南北と申しましたが、日本とそれから地中海の南、アフリカも含めての南、の間の友好のためにも大きな仕事をなさってきました。

今日のお話のタイトルは、ご案内のとおり「地中海における文明の起源について」であります。

歴史のはじまり

いわゆる文明の起源の問題について話す前に、やはり新石器時代の革命によって、これが地中海の文明を準備する非常に重要なステップであったということをお話ししたいと思います。新石器時代にモノを奪う人間から、モノを作る、生産する人間へと人間の生活の在り方が変わったわけであります。

それまでは狩猟を主な生業としていた人間が、農業の発達によって収穫し、そして牧畜が発達する、という変化が起こった。

この新石器時代に、それまでの穴を掘って住む、穴居式の住

宅から、しかもそれは各地に分散して人々は住んでいたわけですが、それが一つの集落を成して住まうようになる。すなわち村というものが出来上がる。これによって共同体において人々は暮らすようになる。そして共同体において、自分たちの安全を集団で守るようになります。

こうして新石器時代に村、村落というものができ、人々は農民ないし職人として暮らしを立てていく。また牧畜も発達しますから、人々は牧人として、動物の群れを放牧地に運ぶ、そういう生活をいたします。従って、基本的には定住民として農民ないし職人が村に住み、そして牧畜で生きる牧者、牧人たちは遊牧民的な生活を送り、牧草地を探して動物たちを連れて歩きます。従って、定住はしませんから岩陰の避難所がなければ、折り畳み式の簡易住宅といいますか、移動式の住宅で暮らす、そういう生活形態でした。

このようなさまざまな生産の形態、あるいは生活の形態が専門化することから、創り出されたモノを交換する、すなわち商業が生まれる契機が発生します。

モノの交換あるいは商業は、初めは物々交換で始まるわけですけれども、貨幣というものが発明される以前に、ホメロス的な社会においては、例えば牛が、あるいはアラビア半島においてはラクダが、貨幣に代わる本位、モノとモノを交換する時の貨幣の代わりになるわけです。

この新石器時代に実現されたもの全てをここで列挙する時間はありませんが、しかしその後世界中で展開されるこの文明というもののベースになる必要な物質というものが、すでにこの段階で基本的な形で作り上げられたわけです。

文明の発達に必要な基本的なファクターというふうに申しましたが、その中にはまず文字があります。そして数でもって数えることができるようになり、言葉でコミュニケーションを図ることができるようになり、そして文明の誕生にとって非常に重要なのは宗教であります。この宗教の発生というものは、中期旧石器時代にまでおそらくさかのぼるでありましょう。

この新石器時代の軌跡を想起しつつ、ジャック・コーガンという学者は、その著書『神々の誕生と農業の誕生』の導入において、以下のように書いております。「人類の年代記というものを広いスパンで考えた時に、大変短期間のうちにこの農業、農村の誕生というものと、それから都市文明の発生、そして産業文明の誕生との間には、非常に短いタイムスパンでそのような文明の発達が起こったのだ。そしてもし、われわれのこの大地あるいは地球の支配の中で、非常に重要なターニングポイント、決定的なタ

ーニングポイントがあったとすれば、それは新石器時代に起こったのであり、このターニングポイントからわれわれの今日に至るまでの人類が誕生しているのだ。われわれはその相続人なのである。そしてそこにわれわれの人類の歴史の起源があるのだ」と書いています。

地中海文明の起源

地中海の文明の歴史的な起源をたどる時に、一般に歴史家は次の五つのゾーンに着目いたします。一つはチグリスユーフラテスのメソポタミア、二つはエジプト、三つがシリア、パレスチナ、四つがクレタ、五つがギリシャであります。

その五つの地域のそれぞれにおいて、その文明が、比喩を使えば、受精し、妊娠し、懐胎し、そして出産に至るまでにさまざまな接触と交換があったということを、まず認めてかからねばなりません。

地中海の文明の起源にさかのぼるためには、その主要なコンポーネントを確定しなければなりません。その最も重要なコンポーネント、要素というのはコミュニティとしての都市の成立であります。しかしコミュニティとしての都市というのは、単に家々が一つの都市集落として集まっているというだけでは都市とは言えません。

つまり、家庭、私的生活を行う家屋がただ集まっているというだけではフランス語でいうシテ、都市というものにはなりません。そうした物質的な効用性のレベルを超えて、非物質的なプロジェクトの周りにこのシテ、都市というものは成立する。その非物質的なプロジェクトとは信仰であり、この信仰こそが共同体を一つの結束した単位として固めるセメントの役割を果たすのであります。

この共同体としての都市というものが成立するためには、この神殿と王宮の間に、また人々の住まいと墓の間に一つの、それを一体の空間として形作るような要素が必要です。しかし、世俗の権威である王と、それから聖職者の関係は決して親密なものではありませんでした。

聖と俗との関係は、決して平和なものではなく、多くの葛藤を含み、それがそこに住む人々のコミュニティを破壊しかねないほどの矛盾、あるいは葛藤を持っていた。この都市の現実、このような聖と俗が対立するような都市空間の形態、これはすでに紀元前四〇〇〇年紀にさかのぼる、メソポタミアのシュメール都市において確認される事態です。

このシュメールにおける共同体としての最も古い都市、ここに

歴史と、人類の歴史の最初の祖国があるというふうに言うことができます。シュメールの都市は、発掘とか探索が進んでおりまして、大変豊富なドキュメントがそこから出ておりますけれども、しかしその最たるものは、ギルガメシュの街から出てきたドキュメントであります。

この「旧約聖書」では「エレク」と呼ばれますけれども、シュメール語では「ウルク」と呼ばれているこの英雄ギルガメシュの名前を取った都市、そこにはギルガメシュの武勲詩に述べられている城壁が、多くのこの聖なる空間というものを囲んでおりました。

このギルガメシュの建築というものは、大変首尾一貫したものであり、しかもこの建築材料として石は使うことができなかったので、砂だけでできている、メソポタミアの建築はですね。しかしその都市を作った、あるいはそういう建築を作った建築家たちは、石灰岩のブロックでもって建物の土台を作っていたのです。

ギルガメシュのこのサンクチュアリ、聖域は「エアンナ」と呼ばれる一つの区域全体を占めており、このエアンナとは、この文献学者の研究では「アンの家」という意味でありました。

このエアンナという神殿のような建築だと考えられますけれども、これはシュメールの他の都市にも認められます。聖なる建築として、この「ウルク」は、神が地上に降りてくるための仲介物として作られている。神が地上に降りてこられるように、そして信者たちにとって神が近い存在であると感じることができるように、そして神の恵みを感じられるようにするための建築でありました。

この聖なる構築物、建築ですけれども、これは何重もの塔からなっており、それは「ジグラット」というふうに呼ばれております。その塔を成す神殿です。このジグラットは旧約聖書で有名なバベルの塔という神話がありますけれども、このバベルというのはバビロンにあったジグラットの一つであった。それがモデルになっているということです。

このウルクという町の発掘からさまざまな、典型的にメソポタミア的な建築のストラクチャーというものが出てきます。

この何重もの塔の形をした建築物ですけれども、これは一二メートルの高さがある人工の山というふうに言っていいわけですが、この聖なる山の上に神殿が建てられ、それを考古学者は、神殿を作っている、土でできているわけですが、その塗料の色から白い神殿、ホワイトテンプルというふうに呼びならわしております。この神殿は、一般的に縦が一九メートル、横が五メートルぐらいという寸法、サイズでありまして、このサンクチュアリとい

うものは山の斜面に吊るされるように立っており、しかも空に向けて建てられている。この構築物をアンドレ・パロという人は、こういうふうに述べております。ついに紀元前四〇〇〇年紀の末から、人類はこのような大地と空をつなぐ巨大なはしごを建てようとしたのだと。それは是が非でも、神々が地上に降りてくることを可能ならしめんがためであったと。

この時代にすでに人々は神的なものとのコンタクトを熱烈に求めていたのです。このジグラットというエラムの神殿にある山型の聖なる塔ですが、このジグラットこそ恐らくは今日に至るまで西洋で見られる大寺院伽藍の鐘楼、あるいはアラブ、イスラム圏に見られるモスクのミナレット、尖塔の起源があるというふうに考えられます。

この共同体としての都市、この都市に集落が固まって都市になるわけですが、これがやはり地中海文明の最も重要な表現であろうと思われます。

この都市、古代都市と言っていいと思いますけれども、これが地中海文明の一つの発生期における特徴であり、その例は、エジプトにおいてはメンフィス、テベス、アケタトン、それから、シリア、パレスチナではビブロス、ティルス、それからエリコ、あるいはジェリコ、それから小アジアのアナトリアでは特にトロイ、そしてキプロスではキチオン、それからパコス、クレタ島ではクノッソス、ギリシャではミケーネ、アテネ、スパルタ、コリント、イタリアではローマ、スペインではガディス、チュニジアではウティカ、カルタゴが挙げられます。

このような古代都市は、まず初めメソポタミアで生まれたというふうに申しました。しかし、その古代都市が地中海一帯に広がっていく上では、フェニキア人とギリシャ人の貢献が大きかったということは認めねばなりません。特にこれは西地中海にフェニキア人とギリシャ人が植民政策を展開したことによって、都市というものが広まったんだと。

従って、東の方のメソポタミアで始まり、そこに起源がある地中海の文明が、西地中海全体に広がっていく、その普及の役割、それは多様な形を取るが、しかし統一の取れた文明、その担い手はフェニキア人でありギリシャ人でありました。

しかし、フェニキア人にとってもギリシャ人にとっても、この古代都市、これはメソポタミアの古代都市の特徴を継承していたのであって、メソポタミア、エジプトそれからシリア、パレスチナの古代都市と同じく共同体としての性格を分有しておりました。すなわち聖と俗との、聖の空間と俗の空間の間の分割と結合というものが都市としての骨格を成しているという特徴です。

従って、メソポタミアが地中海文明に一つの形を与えたとすれば、ミケーネ文明の担い手であるギリシャ人、そしてフェニキア人がその地中海文明を伝播、普及させるメリットを持ったんだと。

もちろんこの家庭、家屋の、それから宗教的な建築物の建築に関しては、多く言うべきことがあります。またミレトスのヒッポダモスに帰せられるところの碁盤状の都市計画については言うことがたくさんあります。

この地中海文明の成立におけるエジプトの役割というものについて一言申しますと、エジプトは確かに地中海の一部を成します。しかし、政治的には、エジプトは大変野心的な国でありましたが、文化的にはどちらかというと内向的で、それで自足の感情に促されて、あまり自分たちの文化を外へ輸出することには熱心じゃなかったということが言えます。

エジプト人は自分たちの文明に大変大きな誇りを持っていたが故に、これを他の民族と分け持とうとする気持ちを持ちませんでした。

エジプトからの文明の輸出というものは少なかったのですが、しかしエジプト人と接触した他民族たちは、このエジプト人の信仰とくに神々の崇拝というものに大変大きな影響を受け、宗教感情はエジプトの神というものをエジプト以外の民族が受け入れていった。

地中海のイシス神は女神で、オシリスの妻のイシスです。イシス信仰というものが大変広く広がっておりますが、このイシス信仰というものは、エジプトに起源があるのであります。従って、地中海一帯における一神教、アケナトンと共に一神教の最初はエジプト起源であると考えられ、また有名なモーゼはエジプトのレビ族の出身とされておりますけれども、エジプト人だったわけで、モーゼと共に一神教が生まれるわけですが、これは大きく言えば、エジプト起源であると言うことができます。しかもモーゼの名前、モイーズという名前は、この女神のイシスとのつながりが連想されるわけです。

個人の誕生

エジプト人については申しました。次に、フェニキア人とギリシャ人の段階で、この古代の共同体的な都市から市民からなる都市への移行というものがなされました。その市民から成る都市への移行、それは古代における個人の誕生というものと無縁ではありません。またもう一つ重要なことは、アルファベットの文字の発明と関係があります。

このフェニキア人とギリシャ人、これは地中海文明の生みの親と言っていいわけですが、この個人の誕生とアルファベット、文字の発明ということで、文明の推進者としての役割を演じた。個人についてでありますけれども、ギリシャの紀元前五世紀の歴史家、ヘロドトスはフェニキア人がカドモスを媒介にして、ギリシャ人の世界に導入した。個人というものの発明です。これについてヘロドトスは語っておりません。語ることをネグッております。

このカドモスというのはテーベという都市の創建者であり、フェニキアの王様の息子だったということで、従って、ギリシャの都市テーベの創建者はフェニキア人だったということになります。それでヘロドトスはこのカドモスの貢献について言及しなかったのだと思われますが、この地中海の文化的な人間学、アンソロポロジーの事象において、この個人の誕生については、フェニキア人に負うてるところが大きいのです。それでこの個人とは、自らの運命に責任を持ち、そして、自らが住まう共同体の経営、あるいは運営に参画する権利を主張すべく、自らその役割を進んで果たそうとする存在、それが個人であります。

このカドモスというフェニキア出身の若い船乗りは、これについてホメロスは『オデュッセイア』の中でカドモスについて語っているんです。自らの商品を門口から門口へ歩いて販売して歩くという形で、カドモスの行状について語っています。このカドモスは自らの生まれ故郷から離れ、そして自ら出身の部族、あるいはフラトリア、兄弟団の外で生きながら、しかし決して自らの出自に関する記憶というものを打ち捨てることはいたしません。

ここに、カドモスの軌跡において、軌跡というのは行状において、将来ギリシャに成立する市民というものの萌芽的な形を見ることができます。この市民という概念は、ギリシャにおいてその発展し開花する適切な場所、あるいは条件を見出したのであります。

二〇〇〇年紀の末までは、地中海世界における政治生活というものは、いわば東地中海、すなわち、メソポタミア、エジプト、シリア、パレスチナ、それからクレタ島、ミケーネ等に集中しておりました。

従って、文明はまず地中海の東半分で発達したわけですけれども、それが西地中海に及ぶには、今日のチュニジアにおける古代都市、カルタゴの誕生まで待たねばなりませんでした。あるいは、カルタゴの誕生とともにフェニキア人が、海上貿易で有名なフェニキア人が地中海一帯にディアスポラという形でもって離散することによって、地中海の文明が西の方へ波及していくわけで

あります。それまでは西の地中海というのは、いわば暗闇の中に沈んでいた。

従って、この西地中海一帯はまだ先史時代、せいぜい新石器時代ないし原始時代、プロトヒストリーと呼ばれる原始時代の段階にとどまっていたと言うことができます。しかしフェニキア人の西遷、西の方へ離散することによって、まず重要なことはアルファベットの文字が伝えられます。この文字が地中海において情報伝達のベースとなる重要な手段となり、それがあらゆる領域における知と、ノウハウの発展、あるいは伝達を加速化させます。

文字

さっき、カドモスはテーベの創建者で、フェニキア王の息子だったと申しましたが、このカドモス、さまざまなギリシャの伝統によれば、カドモスはフェニキア人がギリシャにイミグレーション、渡来したということの代表的な例ですが、カドモスは多くの文化的な伝播によって、その業績がたたえられるべきであります。まずカドミオンやテーベといった都市の建設、それからディオニュソス神への、ディオニュソス崇拝のような信仰の導入がカドモスによって行われ、そして最も重要な文化的な伝播としては、フェニキアからギリシャへの、アルファベットの文字の貢献がもたらされたことであります。

ヘロドトスは『歴史』の第五巻に、次のようなことを書き記しております。「これらフェニキア人はカドモスと共にギリシャにやってきて、ギリシャに定住し、多くの知識をギリシャにもたらした。その中の一番重要なのは文字である。このフェニキア文字をギリシャ人は、以前は知らなかった。ギリシャ人は文字を持っていなかったのが、フェニキア文字を習得したのである。従ってこのフェニキア人たちが、いわばアルファベット文字の創造者であり、ギリシャへそれを伝えたのである。時代が経るにつれて、もちろん言葉は変わっていくわけだが、カドモスの人々もこの文字の形を変えていく。それでこの周辺の地域、ギリシャ周辺の地域、周辺はイオニア族のギリシャ人によって住まわれており、彼らもまたこのフェニキア人から文字を学び、それを伝え、そしてやや異なった形の文字としてそれを使い、それが普及していく。その元にはフェニキア人がギリシャにその文字を、このフォイニケイアという形で伝えたことが出発点にあるのだ」と。

ヨーロッパの語源は、神話ではオイロペという女性の神様です。これはティルスの王である、アゲノールの二人の子供、女の子がオイロペで、その兄がカドモスであるという神話があって、このフェニキア人が東洋と西洋の間に民族文化的な架け橋をかけ

たということをよく表しております。

と申しますのは、このオイロペの兄弟である、男の兄弟であるカドモスの名前ですが、このオスというギリシャ語の接尾辞を取りますと、そうするとカドムとなり、これはフェニキア語のケドゥムに対応します。このケドゥムというのはフェニキア語ではまさに東洋、オリエントを意味する言葉だったのです。

オイロペの兄弟のカドモス、この名前はオリエントを意味していたんだと、フェニキア語ではですね。従って、この地理上の帰属、あるいは起源というものをカドモスという名前は示している。ギリシャ人にとってカドモスというのは東から、東方からやって来るものを意味していた。ここに西洋の懐の中に東洋が同時に発生しているという、神話的なイメージが描き出されております。

オイロペとカドモス、オキシデントとオリエントの結び付きという、これは結婚と申しますか、あるいは民族文化的な相互浸透の表現であると考えられ、それは大変深い意味を後の歴史、人類の歴史に対して持つと考えられます。しかもこの神話というものはフェニキア起源の神話であり、従ってこれは、紀元前一二〇〇年ごろ、エジプトを侵略する海からやってくるさまざまな民族、クレタとかアフリカとかさまざまな民族の侵入の後にこのような変化にプラスに働いたのである。

もちろん、フェニキア人の文明の普及者としての役割、これは例えば、金属、それから木工、木工による建築術、それから造船術、こういったさまざまな領域での技術的な進歩なしにはフェニキア人は、これだけの文明の伝播の仕事を地中海一帯で行うことはできなかったでしょう。彼らの出発点、母港、母なる港、それはティルスとシドン、今ではサイダ、から出発しギリシャへ、そしてさらにギリシャを越えた広い地中海沿岸に日が沈む西方まで彼らは遠出したわけであります。

フェニキアの航海士たちは、行く先々で大変深い痕跡を各地に残していきます。地中海沿岸一帯に商館、商業の建物や植民都市を作り、これによって地中海の政治的な地図を一変させます。

こうして西の地中海、西地中海は新しい発展を遂げます。フェニキア人たちが一つの点をつないだ一つの帝国を作り上げることに成功する。そして彼らの影響力は大変なものでありました。この西の地中海世界を、古代世界から発生した政治・経済・文化的な空間へと結び付けることに成功したのです。

今日のエジプトとチュニジアの間にリビアという国がありますが、古代におけるリビアの世界というものもありました。これは地中海の沿岸の一ゾーンであるわけですが、地中海の経済文化圏

にリビア世界が開かれていく、そしてその地中海の歴史の中に取り込まれていくのも、やはりフェニキア人とそれからカルタゴ人の貢献のおかげです。

古代の今日のリビアに住んでいる人々はリブというふうに呼ばれておりましたけれども、このリブはこのファラオ時代のエジプト、あるいはヘロドトス、後にはヘロドトスの記述によれば、まだ歴史の入口に差しかかったところであり、そのリビアの文化というものは、この専門家が先史時代と歴史時代の間の原始時代というふうに名付ける段階にあったというふうに考えられます。

ともあれ、リビア人、リブはこの文字の使用をフェニキア人から学んでおります。ただし、文字の習得というのはカルタゴの建設以前ではなかったと考えられます。

カルタゴはご存じのとおり、フェニキア人の植民都市として生まれ発展しました。このリビアの、今日残っているリビアで発見され、残っている文書ですけれども、これはかなり後に生まれたものと考えられており、紀元前五世紀になるかならないかというところで、初めてリビアの文書が生まれたと考えられておりますが、これはフェニキアおよびポエニの文字の普及によって、リビアのテクトが古代において書かれたのであると。

ポエニと申しましたけれども、ローマから見たカルタゴをポエニというふうに呼んでいたわけで、従って、リビアに文字が伝わったのはフェニキア文字がカルタゴを通して、ポエニを通して伝わったんだということです。もちろんもともとの土地の言葉はあったわけですが、文字はなかったわけです。それで、ヌミディアの、古代ヌミディアと呼ぶのは今のアルジェリアです。それからモーリタニアというのは今日のモロッコに対応するわけですけれども、今日のアルジェリアやモロッコにある王宮というものも、このカルタゴから伝わってきた文字というものを使うようになる。というか、このカルタゴの文字がさまざまなコンタクト、あるいはこの交易にとって最も便利であると考え、それを取り入れたのであると。

フェニキア人とカルタゴ人の貢献のおかげで、リビア人たちも定住生活のメリットというものを知るようになり、それによって、ヌミディアにおいてもモーリタニアにおいても、アルジェリア、モロッコにおいて住んでいる部族たちの定住化を加速化させることになります。

定住化が進むと、集落というものが都市化という形を取って進行することになります。もちろんこのリビアの集落、村の存在というものは、フェニキアの存在、あるいはカルタゴの建設が、このアフリカの奥まで到達する前に、このリビアの村の存在は確認

されます。

従ってリビアにおける言葉というのは、文字を学ぶ前からあったわけで、いわば、リビア語の地名というものは、この一帯に今日でもたくさん残っていることが確認されます。マグレブ一帯に残っている。

ヌミディア、モーリタニア、アルジェリア、モロッコですね、今日の、王たちはこの住民の定住化、そして都市化というものを奨励した。それはいわば社会的に住民を支配し、また税金を徴収する上で定住化の方が都合がいいからであり、そして王権による行政の行動がより有効に発揮できると考えられたからであり、この定住化ということはこの王宮にとって、あるいはその共同体にとってプラスになるプロジェクトであると施政者は考えていた。

今、アルジェリアとかモロッコと言っておりますけど、これはまだ古代の話ですので、いわゆるイスラム教徒のアラブ人が、この一帯を支配するはるか以前の話であります。政治に関しては、いくつかの新しい概念が、この西地中海一帯にも広がっていった。そしてアフリカまで広がっていったと。例えば国家、市民、それから憲法、それから行政、そして組織化された権力といった概念であります。

アリストテレスは紀元前四世紀の哲学者ですが、政治学においてはっきりとこのカルタゴの憲法というものを取り上げ、それをたたえております。カルタゴ以外のポエニの都市においても、例えばウティカ、イポーネ、レプティス、ハドルメトゥム、ネアポリス、サブラータ、レプシスといった、今日でいうマグレブ一帯にこのような都市が建設されたわけですが、これがそれぞれの地域において大変なプレスティージュといいますか、輝きをもって君臨し、それでこのアフリカの人々に対しても新しい政治形態、あるいは行政の形態を指導する上で役割を果たしたのです。

たくさんの古代都市が、このマグレブ一帯にも作られた。このポエニの都市があったわけですが、その中でも特にケルクアン、これは今日のチュニジアにあって、ボン半島の先端にあり、ケリビアとハワリアの間にある都市です。この地方の伝統に従えば、この町の、このケルクアンの古い名前、呼名はテメゼダッドという名前であって、このテメゼダッドという古い名前はリビア起源の地名であり、従ってこの地域にはその先住民がいたということを明かしております。すなわちポエニ文明というものがいくつかの都市を建設する前に先住民がいたということを明かしております。その最も古い名残、遺跡というものは、この紀元前六世紀のものまで確認されております。

西地中海の諸民族に対し、フェニキア人は従ってその固有の

経験というものを伝えたのである。特に、またこのセム系のオリエントの経験、すなわちエジプトとか小アジアの経験をも、西地中海の諸民族にフェニキア人が伝えている。文字だけではなく、フェニキアのフェニキア語はキプロスでも使われ、また小アジアでも、それからギリシャ都市においても、またサルデーニャ、シチリアそれから西の、さらに西に行ってバレアレス諸島、それからイベリア半島まで行ったということです。

地中海の中央から政府の地域は、従ってこのようにしてきちんと確保された地域を成し、またあらゆる侵略、侵入の企てから勇敢に守られた地域、領土でありました。またギリシャのディアスポラ、地中海一帯へのギリシャ人の離散、これはその元にはフェニキア人が地中海一帯で勢力を拡張したために、その例にならってギリシャ人がフェニキア人の後を追うようにして、地中海一帯に離散していったのであると。フェニキア人の成功例というものを見たギリシャ人たちが、その例にならって、そのフェニキア人の後を追ったと。従ってこうしてギリシャ人たちは、自由な個人の偉大さというものを発見し、またしかし一つのコミュニティというものの中で連帯して生活を組み立てていくことの利点というものを見出したのである。

従って地中海文明の伝搬者としては、第一波がフェニキア人、第二波がギリシャ人ということになるわけですが、この特に西の地中海へと文明を伝播していく上で、この二つの影響圏というものが形成された。その結果、この地中海一帯にもう一つの新しい地政学的な地図が描かれることになります。フェニキア人とギリシャ人の二つの影響圏と、そこではさまざまな文明が交錯し、もちろん境界線というものはあるわけですが、決してその境界線そのものの移動、あるいはさえぎるような、要するに融通無碍な境界というものがあったと。従ってこの文化間の交錯とかエクスチェンジとか、あるいは対話というものが容易に成立し、それは決してギリシャ人とフェニキア人の間だけではなく、例えば、リビア、あるいはサルデーニャ、シチリア、イベリアなどに住んでいる先住民たちとの間の文化的な交換と対話も容易に成立したのであります。

西地中海がいくつかの影響圏に分割されたということ、その結果いくつかのコンフリクチュアルな状況が生まれ、また戦争まで起こることになる。しかし、収支決算してみると、総合的にはこれはポジティブな効果を生んだのだと。フェニキア人とカルタゴ人はこの多くの民族に、さまざまな民族に対してこの地中海文明と呼べるものの形成に貢献することを可能ならしめたのである。従って、この人間の génie、天才、才能というものが人類の

名にふさわしいものになるような、そういう素晴らしい一つの叙事詩というものが地中海で描かれたのである。

フェニキア人のおかげで、またそのフェニキア人の開放性、開放的な能力のおかげで、地中海は新しいものになり、また一層豊かなものになりました。特にカルタゴの誕生以降、そしてポエニ世界の建設によって。そこにおいてはフェニキアの文化というものが圧倒的な優位を占めるわけですが、しかしそれが他の文化的なコンポーネントと決して対立することはなかった。その他の文化というものがどのような性質のものであれ、またどのような起源のものであれ、特に地域ごとの、あるいはローカルな遺産、文化遺産という時の遺産に結び付くような文化と、このフェニキアの文化は敵対、対立するものではなかった。フェニキア文明というものは、法律的に開かれたものであり、そこには人種主義はなく、また排除というものは存在し得なかったと。

もちろんこの地中海文明が形作られる上でさまざまな小麦粉、こね粉がミックスされていくわけですが、その中で商業が果たした役割は大きいものがあります。

特に紀元前一六五〇年から一二〇〇年の間に、ギリシャ人、ミケーネ人たちは地中海中を巡り、そして各地にその痕跡を残しました。彼らは貿易、交易に長けた民族でした。ミケーネ人、ギリシャ人がこの地中海のこね粉を練り上げることに貢献したのであります。

ミケーネ人に続いてフェニキア人が、今度は一二世紀末から、このミケーネ人に取って代わってこのような文明の伝播の役割を果たし、例えば紀元前一一一〇年にはスペインにカディスの町を作り、それから一一〇〇年にはチュニジアにウティカを作ったわけで、それでフェニキア人もまた地中海のこね粉を練り上げる上で貢献した。

この時代に交易は物々交換によって初め行われ、あるいは本位として金属が使われていたわけですが、紀元前六世紀になりますと、小アジアのリディア人が信用貨幣というものを発明することによって交易が容易になりました。これは運ぶことが容易であり、その信用貨幣の価値は国家が保証するということで流通が発達します。

このような文明の伝播と交錯と対話の中から、この地中海都市というものが生まれます。これはこの個人としての人間の幸いなる帰結としての集合で、集団で生きる人間というものの表現、それが地中海都市の誕生ということであります。その地中海都市に生きる人間は、この部族やあるいはフラトリアというその兄弟団のレベルを超えた共通の運命を担い、そしてかつこの共通のプロ

ジェクトの形成に参画し、またこのコミニティ、共同体の政治、あるいは運営に携わる、そういう人間像というものがここの地中海都市を支えることになります。これが従って、いわゆる「シテ」と、都市国家と呼ばれるものの地中海における誕生です。

市民としての人間、即ち、自らの義務と権利に責任を負い、それを強く意識した市民という概念の誕生です。

ローマ人と地中海

私の話の最後の段階になりますが、ローマ人の地中海文明、ローマ人が地中海文明を完成させたという話であります。ローマは政治的に文化的に、この地中海のあらゆる地域を一つの統一体にまとめ上げたという大きな功績があります。もちろん初めはそれは征服によって、そしてしかもローマ世界というものが長く存続し得たことによってその統一が可能になりました。このローマという帝国と言っていいでしょうか、これがその魅力、あるいは誘惑というものが大変大きなものであったがために、地中海全域がローマ市民権のメリットを要求するようになります。

地中海一帯の諸民族がローマに合体することを望みます。ローマ人になることを望みます。というのは、ローマ市民権を獲得することによって、しかも自らの固有の存在であり続け、そして自らの起源を失うことなく、なおかつ地中海文明という普遍的な文明に帰属することを誇りとすることができるからです。

マドールという町出身の、マドールはアルジェリアのスークハラスという町ですけれども、マドール出身のアプレイウスという紀元前二世紀の人物がおりますが、ヌミディアの出身であります。すなわちベルベル人であった。このアプレイウスは半分ヌミディア人であり、また半分ゲトリア人であるというふうに自らを名乗っておりますが、しかし、ローマ世界の一員であることに誇りを持っておりました。またこのアプレイウスというのは『黄金のロバ』の作者です。

このアプレイウスはたくさん講演をした、講話をした。そのうちの一つにおいて、特にカルタゴの劇場で行った講話においてこのアプレイウスは、カルタゴ市民に向けて次のように言っております。「このカルタゴ、われわれが今ここに居る、一堂に会しているこのカルタゴを褒めたたえることほど、偉大な賛辞というものが他にあろうか。この都市としてのカルタゴをたたえること、そしてそのカルタゴの住民は全て教養のある存在であり、全ての学問に精通した存在であり、子どもは学び、それから若者は学問を身に付け、そして年老いたる者は若者たちに教えようとする。カルタゴ、アフリカの天のミューズ、カルタゴ、これはこのロー

マの衣服をトーガといいますが、このトーガをまとったローマ市民からなるピープルの女神、それがカルタゴである」という言葉を残しております。

ローマ皇帝のカラカラ二世でありますが、ローマ皇帝のカラカラはもちろん文化教養的にはローマ人であったわけですが、出身はベルベルでありました。このカラカラは紀元後二一二年に、ローマ帝国のあらゆる自由民に対してローマ市民権を与えるという抜群の栄誉というものを持った皇帝です。暴君といわれておりますけれども。

このローマというものによって、次第に獲得されたこの開放性のおかげで、この地中海全体が誇り高く、われわれはローマの一員であるということができるようになり、共通の文明というもの、地中海一帯の諸民族に共通の文明というものを生み出すことができるようになったんだと。

しかしこの地中海世界のローマ化という現象、これはそれに先立つフェニキア人、そしてギリシャ人の貢献なしには達成し得なかったはずのものです。

以上のようなわけで、フェニキア人とギリシャ人とローマ人、これがこの普遍的な文明の源である地中海というものを作り上げた職人としての、アルティザンとしての功績を分け持つことができるのであるということです。

話が大変長くなって恐縮であります。辛抱強く私のお話と通訳を聞いてくださった皆さまに心からお礼を申し上げます。